琴後集 一

へ 2
4328
1

琴後集序

和歌詩也、短歌絶句之類也、長歌歌行之類也、六義既備、抑揚頓挫、無如詩、然、余獨讀藤式部源氏傳知左氏荘周司馬遷之文、可以和言為之、源氏傳以上、何其無聞也、源氏傳以後、何其無繼之者也、和文既有左氏荘周司馬遷之文、安

へ2
4328
1-4
38

門 へ2 號 4328 巻 1
門 へ4 號 4350 巻 1

得無唐宋八家之文哉求之於古而不得求之於今而得之於平春海先生先生有栞後集如干巻其歌則不復論余獨論其文曰記廿一首序十八首題跋十二首書牘廿三首雜文三首墓碑二首祭文一首外集廿八首編文具此諸體非唐宋八家別集之制乎升降前

却不失分寸文其步驟也抑揚開闔操縦起伏文其變化也整齊而錯落勁窣而婉曲文其辭氣也前提後襯回抱接初留筍待後奇峰突起横雲斷山文其形勢也截然有界段落之文也綿然相屬過接之文也承上起下轉捩之文也作文具此數法非唐宋八家之筆乎

先生非獨其於文尓、其於論道亦云我邦之所道、周公孔子之道、舎周公孔子之道、而別取道於我太古、吾未之聞也、故和字非我字假漢字充我音也、衣服冠冕、皆隋唐制度也、百官有司、皆學唐制稍變之也、律令格式、皆摹倣唐制也、博士立明經文章天文陰陽律算音

諸科、不立和學歌學博士、所謂和歌、博士者、出自江匡房戯称、和學歌學之名、考之古未之有也、和學也者、儒者之通
本朝典故言辭也已、歌學也者、儒者而作歌也已、舎周公孔子之道、而別建道者、吾未之聞也、天竺有釋氏之道、後漢傳之、而盛於隋唐、唐

之詩人、有儒有僧、李白杜甫韓愈
儒也、王維白居易、内佛外儒也、其
詩非風雅之音、則釋氏之偈也、宮
人工女、亦浴二家風者也、吾儕雖
庸陋、亦儒也、儒而歌者也、
本朝制度文物、已皆奉周公孔子道
法、而其信佛者亦多、故
本朝之俗、少而儒、老而佛、自中古以
来盡然、由是觀之、非儒則佛、舍此
二道而別建道、吾未之聞也、今之
和學者、恥我邦別無道、牽強傅會、
妄引我古史、欺人欺已、吾安得不
辨之哉、質賢先生之持論有超於
世所謂和學者流、亘乎、先生之文、
卓異儁傑、有唐宋八家之風矣、

日本百三十世天皇文化七年秋九月　陸奥葛質序

おほよそふみのはしかきは
世に歌よむ人おほかるはみなそれそれに心を
くらふるは歌につましこそのふみをぬらるゝ
ゆゑはまゝそらの世にいふへまれひとる人
おほしのるは世さられ書をもいきてあるを
ほつ乃おこまて名みにしはしくあなはいのまる
をれふるてぬしにむをふあなるを後の世の
物語りとて残されたるものゝ人とふとえを
よらはきはしられたるにらたゝひいつ

故先光清風氏
大正十三年十月三十日 先光華氏寄贈

たらはかしたいに身く続あるし志ならぬもちれたれ
やる事ほらしの文字に書くなきしほさらるも
こゝろざし始めたにむかへて汎く行なたらひおほ
しゆにゆうれし毎にこゝろなきやし人々いと
たより程かよ性をしへしるの人我が敢ぬほど
多くに幼中ふはなかれとも深く世をいふよりた
きみにゆく与後はせしつるぬは出さぬか
我が師にしこ京のやうなる方をがらんおもへる
翁しの名をいふべく称たれ文すれどもひき

かきしるす事は謹もよく志れるをしられまいは
いはしそれたいし海かひをたしぬ服部仲英
ぬしに名高おくらまししとて仲英ぬしも身まか
りまして、精庵士寧ぬしよ志らるゝひ中比らや
こにのなまて皆川伯恭ぬしにとらむ江の
禰る分ほく文淵よ、伊藤東涯儒安世と文
仲なるいへ世よとそれるものとしたにあ
たゆふ屋むつひとをふいましかは、かつらうをに
そこを名記しるして北邨の時代にあるを

師くれしおほしまする歌学にこそむらん
たえてやんごとなき御方へワかりにめさる
都ことに好ます様とて花よあしかも月にう
かるゝほふなる朝夕あつく云れよ法らん
おそらして茶とろワさふぬとあしくされし
のとことも是れハわまれ出る人乃ためふ
さ師こそもらまいかくもとめて歌のことよわきき
ふしぶく思ふところて歌やまれたるまじく
まうし次つき徳してるをへらまじき無しめの

歌あまさなりき歌をよくたてとめせられ
しわらハいつくねとわのつゆさめくせあ
去られ人よこそらひられてやうく天下た
うけもみらきこもなかなるをるき毎ちろし
歌ぬ家すむ人となよい、へてある藤春海あきと
はりいくさるに其の都き中ふなたりたり
き子のおかれもろこし吉田のとちハ山よ
ほひ旅く去り旧なみ中きたるを好ます歌
歌さひろはまのこ海中小去ゆかる布し

をんとせられなかり文詞は、おかしむ。さりとも
ろうにいはゞ言葉とこふこそなるまじと
残そとあはさと忠言をはふきてあるらし
くひとつのはる歌思ひかまへらまてつさて
めてたかるんかめせつきさる世の人翁とて
り歌よむをぬみ思ひむを翁とさしてぬる
抜へく又まるに上つ代の学さるたかひとの
こ思ひん意翁をさしてぬれはへくますこそをは
口きるなひのをりせなかみよおもひむを

翁とさしてぬなるへしかまれおかし高きわ
をひのそ学字とれはひふ翁とはかりし
て分子のまつる道とうしれひそて、かいと
たゝ思ふらふ年月をおそられ志のゆきて
のらこれ奈りとうかひふとされるを
いてや分子の宝をたゝ志はしいるゝ不快
乃とみれりこれ葉と学と八字こしへに翁
きかしとるもての道なり翁たてふまわし
くおくさせしかとこの葉ときれひとふと

すきたる深山にて木下の花ちらけれはとは
翁とよりいふへくもたれはうやまはる
んされとも志てはさりし今此ころの哥のふ、
ゝ世にかゝるねくひろらてあひさおほれ
傳子ひのみことの梅枝にあされれゆかはたる翁
を天乃下諸たちのまわりといふこともの
はしらあらぬのとまめぬへしかもとく
此集の名にかふせる神よ歌志ことの祖
年を古今記り探りよせいふことも乃

あれよまをさむもとひろかれする事を縁とろ

清水濱臣

自序

昔父の世にいまそかりし時あ性れ道にふか
うんよせさまへりし事にふきものひまにこれ
なふられし器とも家にあまたつたへたる残
ところ／＼たひくれ火にあみそていまそおほく
うせにてゆきてそてあつまひとつるんこられきの
こむりし志のふるくさりひにあたらむたるさとし
草れいなお理残あしためつくれてちひさきふ
あやつ残おものつねに纏みれらさん本とさるむ

またつ字ておもひ々らはのあはれまことにおのつから
家の寶なれはそこらによ所得させてられ
のちのちまでにおきつけ伝へられ琴ひく
事をなさんにはねと絲なき弦まさくわておもひ
をや理しためしもあれはとてこれをわのかく
らひ人にもてきてことかみに硯一火と経一琴を
陳よつ一より出をあててほこられさとや
東やとを弦入に学ひおのんよりれ人に
まて来ていひけりとしおもものしまへら

言の葉ともはいのちしまふそかきあはめ語は
ますかそわれら筆に任せよねつせんといふ
事はうれしき事なれはさらはつてにまことの系
弦人にうたに学れおし伝へん事はえならし
きわさなるを伝れとあすことしおもひをよせ
んをこあしものつたいつくにならねて伝へんを
ほいなしとそかくも書つる庭のんやうにとり
なしまつんにふうれ々れところへ家の書
人てかのつよめとらうてそのきあはめんとて

ゆくさて名をさへしのぶといふなりけり琴後
とこそいふなれとてこれまきのはしにしつの
たまふのきこえさする

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴志理の翁

琴後集巻一

春歌

年内立春

たかくこのとし行人にいそかれてとしのうちより春や来ぬらん
いそきまつ春をむかへしき老ぬとてよはきはきらぬ人あらそひよ

元日

むつきはきのふより梅をかさしはしこゝしも春はふみくらさき
めつらしと春を待とる心かりしはあれとも加くしさうきれ
春くれやきふいそれすも引てとらん朽木すてたる老のこゝろも
初日子のひくりまちとるわかみよく海をやふ世のはるの心を

元日雪のふりきれて

雪ふかくあくる朝戸はさく谷の松もうきこせて春は来にけり

元日雪のあしたきこゆる人乃まて来にけれハ

庭の雪の跡もめつらし人を先春くともなしとはるゝと思へハ

禁中立春

諸士のさくひろ露てほのくとあくる諸門に春そたちにけり

春のはしめる

はくも孫の高殿乃こゆふ霧はゝすみて河原に春そたちにけり

百司ら法もくる法もはらふなり君か御代に春そうつしも

巷街迎春

あやのきぬ布のみもともあらためて春来ぬるとゝゆるとしかな

うちとこふひてそくゝしうとほくひきるふ春立てより

むらうさ母におほえきれハ

霜ゆきふあへしと思ひし老か身のまつしもとれの春に逢ふり

くち木をこふにおもひんさく花に法うてもあらんはるにあふ身を

子春海

猿猴しはあをともこえす影かすみたなはの淵にゐる立しより

氷解

大は宮ねかきひのはらくうちとけて志つく小田ねに春たちぬり

泉響滴春風

あふさろや岩間のしたに松とき春あり水あきとくはるのやま風

風光日々新

雅消えやむほりあつる般こそはのくむあのねそひゆく

江上春興多

すゞなみもよほふ岸を江のうゐ柳いつまみのきによりいつなりん

春色浮水

ほのぼのと霞む河とのあさ風にはるたちくへるなかなみなる浪

毎山有春色

うらうらと出る日影にさそはれてかすみにほはぬ山の端もなし

春日

折しもむかふ里の波をひろけて野日に浮へるもみの河つら

春日望山

をはくもみゆる花を雪にあらはれて霞にほふも山しきし

大ひえやをひらみの山の影うすみさちかさねる春のいろいろ

かひかねの高根の雪かつおえて春はほのかにかすみさそふ

春生人意中

春といへる人の心にはそふぬ世をもわすれかのあそひのこかれ

白河少将殿に初めてまる時陽春布徳といふことを

雪もおえるおもえてまさしのくはるのそえをかをり出られぬ

泉暖草色春

氷たへしれもきえにほそつてゆふ風の小草もるやよそきなり

家々翫春

みやこ人あるいはとなし花かりのすさみふされもとひとゝはとつ

春風枕芳

梅の香をのせしふ枕いまくにあやふきゝ夢もよしそみをきる

子日

子の日するきみのためと引まゝにひかれて千世の春やかさねん

祝乃日と引や小松のすゑ遠も袖のこゝろそ千世の為なる

松君やよはひとゝもにゆくすゑも千世乃子の日のためしはひき

長枝か家の子日に

松も引人もひかれて千世や経んまつ子をいはふ宿に来ぬれは

かくしつゝ千世をかさねん君か為にけふ子の日乃松もむつましき

わすれめやいはふもはる子のむつましき庭ふすゑぬ君かよはひは

引うゑしめはゝしきふやとの松あまたおもる千とせをまてとへとも

かくしはゝ松のねをさへとしまてもありへてけふ子日をいはせん

百首歌の中に正敏子日

うれしさと引かさねまく春のゝはきふに子の日やめくり来ぬらん

梅かやに子日しに汲かりて

梅さくはつねもことはんを春の松にひかるゝきのふちりかな

賭弓

ためしとて鶯の羽もみさつやとりきのふさたなるすもゝ葉の庭

此殿のこへ見あるしやとゝまれいそのはるさの袖つらふなり

霞

みよしのは増山しき山行るへてかすみそめても色ふかきかな

春しの孫の雲さへ春の色こそんてかすみそめたる峰ほゝきかな

初春霞

春はやきあさ海のやうの沢かすみきめけ海かふ色としならし

山霞

春のくる八重の山時たつ名のさ山さしてそこともわかさりけり

霞添山色

うらうらとかすみそめたるあさより日影にほはぬ山のおもかし

暮山霞

立ならふ高松のひもろかきくれて霞にこもる夕はへく日で

嶺上霞

みよしのゝゆふのみさへ春くれは高根かゝけて先霞らむ

遥峰帯晩霞

夕日さす神のこゝろはあらはれてかすみにへたつあかりの空

ゆふかけてす帰る翅をかつおえて霞のこるとふるの山

浦霞

住のえのうらの松風にほたえてかすみにこもる沖つしら浪

江霞

ふすはえや波のうへなるみをはくしはるは霞のかこまこそあれ

行路霞

あさことに打かふ袖もほのくとかすむとや路の春のとき

松原霞

むちるは里近くは立まとて三輪山を志るもかゝせる夕霞かな

湖上霞

布施のうみや春深からし佐保姫のかすみの衣もたなもくしけり

春畑

入日さす遠山もとの里みえてかすみをわけてゆふきぬるかな

鶯

花なきかゝる山さとのうくひすやわきいつはもはるをしくらん

うくひすの声いちはやき山さとをはるきぬとは誰かいひけん

いさゝめにいきつむ竹のえたよりもなく鶯の声そかはせぬ

早春鶯

鶯もむかしのさかえをまふすとや住吉の初音をそ鳴

南枝暖待鶯

うち柳なひく池江のこなみははや鶯の声もなかれきり

鶯のなつ声をきゝつやと人のとひけれは

かくて世の春をまちわふる宿なれは鶯の声もうとくそありける

春鶯呼客

うくひすの声にひかれて花もなきやとはとへれと人をまちける

同しくは人のもとへ鶯を歓声といふことを

鶯の初音をそ世をよはふなるたかきふる門をもまちえて

竹裡鶯

はる来ぬと告わたるなる鶯の声もおくある竹のそのはらなき

うちに鶯なく

ほのほのと鳴る枝つたふうくひすの声にしらめる園のうめか枝

窓鶯

なれてこそやともともなれ竹にみしとさしこめよ清との鶯

閑居鶯

昔人をまちすたちやむかしの我とかさねてみるおもかけ

里鶯

かくらふる竹田のさとをとひくれはまつうくひすの音をそきく

うくひすの夢のまくらにおとつれてさそはてなき里もはるや知らん

雨後鶯

雨はれてゆふくれさきのねくらしめてもあやなく鶯の聲

若菜

はるをまつ子世のさかえいはひしさもたれもとにあつむ若菜こそあり

多春摘若菜

きのふとはいちふるのゝのへにあすもみえし春菜摘そられな

雪中求若菜

かきわけてみえすとも雪乃あらせりはさて猶あさまを摘へりけり

人にわかなやるとて

初春のわかなのわかなをはしめてそられきこその松をつゝむ

女かたもとられつむとて

色をやめのまこゝろにつむとふめれは和かなをさへに祝ひとそ君

春雪

見るうちにはるかくすゝむ味雪はも雨さる壁にふれはこゝに

残雪

わすれては松の梢にありふ山の木かけも日数へてなほ残る雪

雪消山色静

雪きえて花まつほかと山乃もてかすみなりそ春の以語あるる

梅

ちらさんと思ふ袖さへかをるなりたるその梅は乃こ折のさかりは

なつかしな花の兄まひをみし宿の枝もうけつる梅乃下かせ

春風はうつしかねてき木のもとに梅か香なしめ袖やうれなる

いはほに香にたちぬる花のうつりぬるやひさねとは人にほきてん

梅花風静

ふく風もあるかなきかの梢よりかのそとかをるうめのにほひ

露なからかをれる梅乃にほひ哉ものかたおかれぬ軒風そふく

隣梅

中垣のへたてもよほふ宿の梅それはさへ春はあるしかたなる

一本の梅をかこふなとしてなかるゝ折乃むつまし北ふ

里梅

宿の香に宿のかこりやにほふらん神さかの里乃春の明かの

梅の花さかりにみ山里をとふ

山さとに宿めさくやとのあまたあれはにほひさきあすさふへかりけり

梅近衣香

あまた折るこ袖もにほふくかをる哉さくや梅はのみなみ川風

夕梅

枝のはゝるゝそれの光もくれかゝて梅乃かやしはゆふ暮もなし

月前梅

梅乃そむれかをるやそれとみし宿の枝もかきたとる春のよの月

かきもまほひ花も光をそへてきり月と梅とや枝まふとさなる

月影よるめのむかりてと人のいひされハ折とてとふにそれ

さく梅のなれのひかりやとめてすむ宿の月たよし露むとも

月の夜梅かをれる

月きよし梅か香清しいさらはこの下かけゝる枕かりなし

かつしかの梅見に侍りて

おのはかり手折る枝をかほらすてかくれる雪にこもる花

梅浮水

花の香も浮になかれてゆく水に影さへうつる岸の梅か枝

皆川淇園翁なともなひて伏見の梅谷

のうめ見に侍りて

ちる梅に雨くもおもかへす雪のふかゆくみちのことして

紅梅

たをやめのかさりおかゆる梅のえれかへも夕日うつり色こかれけり

一枝をゆかしの心ゆるにきくめれハ折てかさんこの宿の梅

夏のうち乃紅梅

春毎にひもとくらし色のくれなゐハ布ひ出てこそ色増さりけれ

梅紅白

色をやめのかさねる袖とみる中に心深く梅のかほりしき

紅梅白梅すほいかなしといふことを

にほひ香ハ色をそめぬ梅の心あるれハ紅の花のきちめみすらん

落梅浮水

水上のきしやいつくをたつねらんうかふ花香おくる春のかそ波

柳

なくとなき風にゆらする青柳をかすみなからにかくしよりけり

よりかけし柳のいとそみどりなる庭の錦もうちはへてより

柳添春色

宵の間乃なごりかすめる柳原ほのかにうつるはるの色かな

柳糸緑新

うちたれてやなぎの糸のあさみどりあくることにめづらしきかな

岸柳蔭水

青柳をいとゝみだれに藻かり人のなみをちぬめ春の河つら

岸柳陰舟

あをやなぎうちたれ髪をきはるにはしのゝめや隠なるらむ

柳池の水を挿む

春川の水によとみは波あらふよしの柳乃さはえしきわ

水辺柳

青柳の下枝なびきて河つらはすゝみの糸をあらふとぞみる

江に柳

かきうほを波もまほひて青柳のいとよりかくる河つらの里

河辺柳

ゆく川の底の玉藻とみゆるまてうきしつむ柳影をうつらふ

雨中柳

春雨は降ともみえにやなぎはらあらたなるかはる霞にはて

柳霞

あさみとり霞やそむるとみる斗ぬれていろそふ青柳の糸

柳ニ雪のかゝれるを

ゆきやすむ雪にはあらねともあをによ結ひをとめよ青柳乃いと

柳似烟

春風のかすみ吹とく河つらにみたれぬきぬかや柳なるらん
草のいと春やかなる絲

はる雨も七日ゆかき里行しかへてまひ草かちに野へのこゆるは

残芸草

打よする浪もこえける以保そへて春をしるらん磯乃若草

蕨

袖つけて折ふしるものゝ手すさみにをりあまれなる初わらひ

百首歌の中 岩上早蕨

絶間なきぬゆきての岩乃ちはらひもえあへぬ君か人もこそはめ

初午いなりにまうてゝ

稲荷山杉のもとつ葉をりかさしゆふえゆくは神人かも

いなりやまみやの神杉かみさひていくよの人か折かさしけん

かさしをるけふのさかしといつの世に稲荷乃杉はむすひ初けん

杉むらかまりは乃やしろのみしめ縄されもひかれつ神のいふに

みちとほく詣わひても杉かいたゝき坂ぬさとる袖も露むすに

いなり山杉むらの木をちほのくと露もあるこほの火

春日祭

若なみの花乃しるひのなかき世にためしかもぬ神まつりかな

旅人の立やすらひても霞むてふ三笠のやまの山かきりして

春神祇

おほけなきやまふかしこひの祭とてみこの社にぬさそなはる

岩清水臨時祭

みる人にかさしの花そたまふなるうてなの竹乃若枝かえて

雲の上乃かさしにはゝきたちかはに栄えて千代は波て社しれ

春月

霞とこはなれまつ鶴のねくれなん霞むもあれし春の夜の月

霞中月

かすむ夜の月もきをたとるにわかみをまねぬおかし絶えやと

江上春月

住の江やほそえの波乃かすむ夜はまつのあきらかに月そやとれる

浦春月

すくもたくけふりもたえて霞む夜の月やあかれとうらの浦人

古宮春月

ふるさとの古乃宮そのあれまなる月やむかしの春をしるらむ

幽栖春月

いくとせの春をふるやの板ひさし霞むとすれと月そもれくる

春月幽

さしてゆる身には波路に誘はれてなほ上かすむ春の夜乃月

月入花灘晴

上つ瀬をもれしてへさきて入月の影とら霞のはるゝ大川つる

暁更春月

明ゆくや霞むらむ山こえてほのくもる春のよの月

春曙

しらみゆくとやまのさくら咲そめてかすむ山のは春のあけぼの

水辺春曙

春柳の下のきかすむ六田川月もよどめるはるのあけぼの

閑中春暁

をはゆるまたれやゆるさきしらむ空はしらぬ庭の花の曙

暮山春望

花の色は霞のうちにながめえてねぐらくるはるか山本

春秋のあはれをあらそふを

秋の夜に月をまちたる秋ならばあれどかすむ春の曙のそら

夕春雨

はる雨にふすまをやなくしのびても霞む夕ぐれの山

庵春夜

春雨も音のふなや山のまふかくて世をふる人さとや

幽栖春雨

たとしへもなきおもひを衣なれ我と世をふるたくひと思へば

百花の中閑中春夜

春かくは花されをなほしおもふをもふらでよ都の春夜

春暁

さらめの枕かけゆし春をたゝむうつらひくまの壁への下草

そことなく野へにくらしつ爰をとひ宿をあはれむ人なくに

帰雁

やよしはし雲ともみえよゆく雁のあとを翅と立毎にへく

霞むよの月かこすゑをかへりか花にはなれし心ともなき

霞中帰雁

音にきくきり雁を人にみえしとや霞かくれに雁の行覧

百首歌中澤邊春駒

秋よきる野澤の草にあれてなき駒のこゝろのあれまさるらん

雉

明ぬとてなくやすゝはの雉たちにほのかくるらむ春の山畑

雲雀

すゑとほくあかるゝもゆくか夕なる野澤の末にかきの霞める

雲雀落

春の野乃すみれの床におち来ゆく声もほのかへる夕雲雀かな

おほつかな空にもこはるとなく霞む野守るゝ森のたおつる夕ひはりかな

喚子鳥なくを

はるかなる深山の松乃声のたえふことゝへてもあくよふこ鳥かな

百首歌中谷中喚子鳥

山彦のおとふる夢にしられきゆみ谷のすこしふ呼ようふこ鳥

春虫

うらくと霞むなる野へにとふ蝶のはなさそひのとや風のふくらん

おとろへもものとも見ゆ春のさてわかるゝ人のこと雲乃こゝれ也

春歎

猟人のてらひのいゑ乃縁に縄なかきはる日ほそらす野へかな

春園歎

山行乃そのふ乃あれの雪わうへに芽なかに麻の孫もえにけり

春日

わすれてハ夕鐘をまつのふとたつこそ日も絶春のあらひえおれ

春日遅

野鳥の声に春まちゆく春の日影添くるまかへる雁をはるき絶

遅日

あく迄も花の木のきになれすもや春の日かきの薫ゑてまたる

西園の葩まて開中日長とふとふを

うくひすのかたらふ声もあく迄しほきよ清きにかやなかくへる

心静酌春酒

日もはをおもひなくさむさかつきにいく度もれをうへてハみし

みかの日

まとゐには流に浮せてちる花の香こあまたくるはるの盃

桃

かくはしみなもとなく花のもと迄も任習へるや

紬の色の細う袖もほふまてくるまのもとに夜この花さく

春のいろぬ花としられと木のなをこゝ傍るまゝに人そとひきゐる

梨

夕をやめのすくるを今年のへとや夕まほへる山なしの花

花

咲さりぬほとをあはれとおもふかはるもおくある花の日数よ
ちるをゝしむ人そ中〳〵に咲さかさる花をわすれて思へる
あくまても見れてやるひとられしおは世にいとふなき身なり
春ことのちきりかたもうすき花のあたなる名をいひたすもあはれ
ふへて常の人のこゝろもさくらはなのこゝろもちるやまきのさかりなるらん
咲ちるをしるふさくらは花の思ひ出に姿とすくさぬ春はなかりけり
たれまのこくらさぬ春はあるまれともいつれの年かあくまてみし
みよしのゝおくもあさしとみもてやす花の思ひ出なくく思ひみれは
さく花を雲とみしより春ゆかしからぬ山もはるはなかりけりよ
嵯峨やとおもふ山路やかゝまし花の日数のかすりある葉

春ふかく日山かけ路も花なくして花ちるやほとゝ袖そよくれしお
待わひあるゝさき日花をかさねておもてさきはらへちる花や何ちらん

待花

春の日はおそしと思ふ心ある家にまつ花やはやくへやいひもしめらん

雲山待花

いはゝすゝさくらん花のかつらはそれもひらくさき峰のしら雲

閑中待花

いつしかと待わひる路をなくさめて花さかぬ身の春そのとき花

閑居待花

春ことのをしむよりかさ常の中にまはらともなきすみかえなり

花盛

桜ちれきらハと安れハちるうなも侍し はるさも何の花ちを
人こそ待雲まあきちや 桜もちれさ花のさかりハ雲とこそゆかん

霞ニ花盛

きくら咲大井の里ニ一夜訴て あすはをくらの花も分ん
よしの山乃花もさかりをこそかへ里来て人のかたる
をききて
花ちこれ雲とそかゝる一きりしたかけらふみよしの山

花のさかりニ山里をとふ

かくしはる花しちるすハ家もるゝやの里人とえぬへきられ

見花

ちれみをハあとそく梅ゆく春の日をおもしと誰かいひもめきえ

静見花

霞とふちるさぬちれの色あまハ誰か風よら待たくへま

見花延齢

我とうあるはるのんよひかれなは花ゆ見る世も屈ぬへのりきか

見花逢友

みせまやと人をそしのふ山桜あかぬら待の屈さてなかれは

小金井のちれ見ニ渡りて

春風ハ香をとめられハ花上のう花にる雲ハ花まをまきる

而を屈りて武をとる

おしかきやをられぬ花のすほひをも波ニよせ来る春の河る
多ま河やあさ流ニ渡るとも花ちら桜をりて悔ゆ

河つらの岩に花をまつる

吉川にすゝしく袖もかはらしな花のやとりや桜さく比

舟中見花

こぎ行ひく流れもはなにあくかれてしもとゞめぬ花の河舟

花下忘帰

ゆふぐれてやどりは遠くあつまりの山ほくある花を明日さへもこそ

むきなきにあるじを誰と尋ぬあとと花のかきこそ尋ねさせられ

花下暮日

くるゝまでなれまそはんと花なひなやたかりおりゐすさみしを

花下送日

なつかしみふもとしつあすの風さそはんまでは花にやどらん

花下言志

日数なきたなれもしみしあすていまにあへる我思ひ出ずて

花ふくも花ちりてひにいづくかなる紀へさるに法もあらぬあはれ

花如旧

あはれよの人はかはるを老木なる花は昔のにほひのかはらざるかな

風静花芳

音もなく霞をわけてかをりけり吹くともしらぬ花のした風

花添山春色

はるをしるかすみ色そふあけ山ぢたつのかをりも見え花

毎年見花

春ごとに咲き花をやさくらはなあかぬもろ幾の年に添らん

花忘老

まれにこむ人をとしにかへし我ハ春ハ老をもわすれはてけり

花自有情

さそすしふ花をみせしとちれハかつ枝にのこりてまほふ花もなきけり

千蔭か君須のやとりまてまかりける時花錦を

すミ河つゝミの花乃かけうつす池水ハおもてにあそくやなかるらん

花未飽

咲もちるをおしまふもわハいつかえさくらのゆかぬ里ハなかりを

おくまてもなすはやまし山口のちれる一枝乃はなくかりとも

折花

やま桜ちる枝ニはらはなをぬるハ家よりたきに誰か手折し

これをとりて

折ましを人ならぬを老をなふかくて待のなるはすさみハ

贈花

日を経てもちれるのまれよかと人のこゝろを深くさそふを

ちるわれをとしゆはくさく家に訓しやあすのんなりけん

千蔭か本よしの山乃桜の若木をうつしうゑ

ことをこそて

よしの山名におふ花の種なれハやかて見るまておほしたて

惜花

あさゆふちるうれをハらなて志まおもひこそしもいそく花ニ馴よ

依田佐女

たれに又来んとはたれにたのめとも消えてちりなはいかにしてまし
花ゆゑに人を待とはなくとも
柴の戸のそれかと見れは卯人家すいふと記る後も知るも
やしへて花のもとにそかへり
なかりき花の色香をわすれめや春よむりの末なりとも

花留客

桜それあるしはうつらて待まてたゆく人をなをとゝむらん
花のもとに帰らんことを忘る
旅人の人やはまん花にすく春は旅ねに訓し方なきは

古寺花

くちのこる閼伽井の水をかゝるまて花たいくよ紀らはせ

霧中花

たちかくす霧のそてにもさく花もほとゝひそめてまほふ春の世

雨後花

春雨のあとりすゝほふ花もしめりをあらすと誰かいひけん

嶺花

待かねの峯をは清とひしらあともたなひさくらこ山のも思

志賀花園

ことの葉乃色香もさまさへ来てそ今もほへる志賀の花園

名所花

かく山やたかねのさくら咲ときは底さへほふるやまの池
明ほのや霧かくれの岩門もきれあかりひくあふ坂乃せき

みよしの瀧のしらいとたえむすびわすれぬ花咲にけり

名所桜

桜さくはるの河辺をみわたせは雲の中ゆく舟のこゝろ

関花

ふく風にあらさぬ不破の山さくら花に関守袖やかすらん

春惜寄花

花よりもうつろひかれて春をおしむ身を常に人ぬるをしみそ

寄花祝言

たまふとちかひしも花をかざしつゝ千年の春を待へかりける

寄花夢

わかれゆく春をうつゝと何かいはん夢計なるも花のちるおりに

露の夏さへまれにあくかれつゝ故郷に身をもかへし計に

花衣におつといふことを

折らし猶さ袖なくしちる花をはらひて君の心はとおもへせん

落花

咲きさはおもひはつくる春の日にかとさく花の一さかりなる

をしめとも人はちる花のはなおくて風のこゝろになみ隔すらん

風さそふ瀧への岩波はなをそへたかねのしらゆきにさそふ花ちる

かつきのみよしのゝき雲ひまとえて春風のちるに桜も花ちる

花のちるを見て

雪とふるとおもはゞちるなひもあきらめをちらはらしとはなと思ひそ

やよ桜ちりゆくすゑをしたひなくなさへ風に隔をはらはし

月前落花

月かくハいとあさましやとはすし霞かくれにちる桜かな

雨後落花

春雨のなこりにかゝりてちる露に夜さへあらそふ山さくらかな

海邊落花

風ふけハみね山さくら散にけり雪となみよするすまの浦舟

名所落花

ひらの山花をあらしのふくからに波のしくゆく志賀の浦舟

古宮落花

花ちるとふりし宮乃庭さひていつものはるの跡きまかせし

閑庭落花

うき世をはそむかし君にちる花の雪にあらひて志ほんかき

後のきぬる花のちるを

やまひふ伸さてうけるふ花これたくはける春もかひなかりき

八重桜

一ときありて咲ける花のちるに春をゝしめやへ桜かな

ちりて後花をしるに

なかりしもあくてちりにし花なりし春くふんたはてなかりき

すみれ

いさゝらは春の野もせにやとりせむすみれの花にかせて

菫仕こゝまとりにとて

むらさきのゆかりわかゆるすみれ咲角くれのこ八摘しとこそ

閑居菫

あれはてゝ訪ふ人もなき宿はゆかりへんすみれつみまさん人のため

古砌菫菜

朽のこるみきりの苔も埋もえてすみれさくらやすみれさくらん

菜の花を

すれとても結ひし垣ねの初しほの雲居よりとをしとをしとひゝん

園の菜の花を

世をのかれ春に花やあくかれん野菜ゆふなの花に日にひ比

かきねに

川よりの花もあるとこえ侍らはをきてかへらはし見え

吉閑にもひとく花に待つもれて奈りとこゆる野への垣根に

款冬

雨そゝくをちの花に水ましてやまぶきの花かをれる

なれもまた春をやをしむちる花に山吹の瀬に堪なくらし

苗代

苗代の水口まつりしめそへてあまたのみとやまをいのるらん

燕来

ほとゝきめ門田に今たち帰すなり経おもひすへき時や来ぬらん

浜うし

咲まゝに磯山寺の花しほしをりすよ波に帰るにまかせとは

春色躑躅

池水にうつる時を白はなしとけふより春の波ととそなる

百首歌の中岩上躑躅

あら磯しきいはほにはると咲つゝし妹か衣にうつしの花

所々山振

妹背山中ゆく河にかきこえてにほひかはせる岸の山ふき

雨ふる日ハ室山吹と人のとへはかくそ答て

春雨ハ七日ふれとも山吹のやへさく色ハあせんとそミる

池杜若

むかしの跡に汲もまほひて池水をむらさきにほはせるかきつはた

藤

たいまさる松にかゝりていつまてか我むらさ紀の藤浪の花

浦藤

世乃中の跡とやいはんむらさきの名にある浦ににほふ藤浪

藤懸松

咲そめて千よまてかゝる藤浪にかゝれは木さへむらさきとしもなる

芸春藤

日とかさしに咲そふ花ちれむらさきハいろ深くしも深るてなり

須田君の庭に牡丹をうつしうゑ侍るに歌よめ
とありけれは

大君の名をしもおへる花なれはうつろへもせすうつらぬ色をみるへきかな

志賀山越

ふみなれし人の跡を春ことの花にわすれぬ志賀の山越

ゆふつきて桜えもてぬ志賀の山たれもんやゝ枝にひかれし

田中圖書

雪とのこる花のかゝる佐娥をみてむかしおもゆる志のやま越

正臣か家の賭合に志賀山越といふことを聞て

ちきりし人とこし道もふみし志賀の山ちる花をさへなとを

人こそ花とよめるへし

あともちる花のなかりしもんあらしの風乃よるは何おもなし

春の花を

春もなく暮さしはしを太りをちる花のいろさかりには

言ひすも老をやふまく此園にはるにはやしきりもなしを

浦暮春

ちれいをやす海もありしも我まる浦つたひして春やくれゆく

あらかなく春はくれゆく浦なみの何いつまても見えまゐ

湊暮春

沫とちる波のくれい行もなし比良の湊乃春のくれかた

山家暮春

日なかきもとはれぬまゝにくれきり花より後のしるき山里

暮春雨

ちる花を松のいのるまゝしあいは春のなこりもあめやたえなん

暮春花

あさなゆる何か松もあらんくれてゆくはるにあらそふ花もなきに

よるへてはゝ春の日数をしむとはちらすくなき花をともも

暮春鶯

ちる花をわれまつ老をいつまてたん鶯はものうきもなし

惜春

ゆく春ハ夏とのミこそたとるらめいつくは花をあくまてハこし

惜春不詮

山河やまるハよしもなきものをかひなくとまらしられのこゝろみ

琴後集巻二

夏歌

首夏

みし春のなこりハ日をまて夜こ後も花のかたわハ岩のこなたなり

木のもとに散残る花やかたすほめん時のたもとまさすれかつらみ

短夜躰

なつ山やなかのふ乃花の雲きえて日の影まてほふ野邊の露

山家短夜

やま里ハ古巣にかへる鳥もねにあそれをまへて夜ハ来にけり

山さとのはしるぬ庭ハなほおく苔路に流しる花もみる里

更衣

［蔵書印］

くやしくも深くそ花になれ衣そてのわかれのあるを忘れて

桜いろの袖ぬきかへくらの花にかさぬる衣も色はうしきか

紀なからせし春のこ後もをぬきかへてみしも花に別ぬるか

老後更衣

ぬきかふる袖もやさしなあさ衣きてかさねせし人もある世に

残鶯

ちり残る花まちくへをしむふる巣のくれのうくひすの声

遅桜

盛りとはまほひをうつせ遅桜きれのかとりの袖うすくとも

山路花

手向山もゝさんなく詠とへいはもさくらのぬさとこそなれ

谷路花

世をいとふ身のいほりの柱を桜なかすかきそたぬ人もやしろ

卯月はしめ山寺にて

なほ山やわか咲まうつむかきとへいふ秋の千草の詠もあかれ

残る花ををしむ

あかねさすわかれし春のかたみとそおもふ花さへちらんとやせる

林新樹

三輪山や花より後のかきもよしときはなる花咲さらは

雨中新樹

雨そゝくかさ山のきのなほ木立いまひとしほのみとりそみる

新樹妨月

なほのきや花に手折し梢のこゝろ高く月の影たらしまゝり

若楓

いはねゆる若葉のもとの若楓しもにほへる秋をまつのは

夏陰にほふかへでのくれなゐは露の手染のあさからぬとぞみる

夜山里に侍りて

うつゝさし清みなかりて山里を花のさかりとひなすまゝしきん

卯花

咲しおはせる日数のかとこえてうの花垣を雪みなかけり

卯花籬

うの花乃まをり川をかすむる雪のしらなみかけし斗に

山家卯花

山彦乃かすほたゝぬるなつひてうんこの花くらす雨あしぬまゝに

卯花似雪

うはな咲くる山さとの明ぼのも雪にしらめるみちらるすれ

卯花かすむ月を見る

宮の名をさぶらひからふ垣のきぬにも月のひかりもへだてさまかな

神まつり

夜さこそはまうのゆふさき花きるもゆふかるてもかきるみに

大これ乃まつりの使

神さふる杖のしらなくとせの杉にふや人のたちあらしきん

このわの山す紀乃下こちぬちりてぬきとりゆくいつ使さにうも

神まつるあすいうの日とみなの山つんこそ使をふりそたつ

灌佛

法佛のあらはれためし法のみなかれて世々の人もくみなから
まよふ人乃きよふのためしの毎はしこつふや法乃こゝろをなん

葵

小車にあふひのかつらかきそへてきかは神まつるけふにめくりきぬれは

毎年翫葵

ゆふしらふかきそへいく代かなのましはのあれはなふひにふるそ
卯月もろ〳〵香爾へ折まつふか酒やの壁うりて麻の
むきゆくきこて
また萩原まつらかのしゆく麻のむかしく升いつるあかなん

郎公

待ありすら絡くへは満まふりりき明乃月よあくほとゝきす
さやかもなかるゝ月のむすふれかくるみやまの山かとききし
ものひきは来しはし郎公来て待かとあからいつれよ
おくかひは祈ぬ枝をおもきはかなは一夢とまちあかひて
なれゆきはおくをあかしひの人乃世よ程のほとしよ郎公うある
郎公うひきしつとやる人のかたるをきけはいやほとゝれて
めほとしきおもふら絡はかなはゝるを夜とあほとゝるゝし
ほとゝおすか一夢よ尺しまみなきれ乃あかこれもわかされね
あちなれの花ちるさとのほとゝぎすなくねもかはるかちこそすれ

侍郎公

時鳥かくていく枝のむらさめ球寛かのめよはなしてきへよ

人伝にきゝつるまゝに郭公まちよわりても鳴やなのまん

初聞郭公

ほとゝきすまつとかたる人もなし初音やたれに先もらしけん

はしめてほとゝきすをきゝて

郭公さやかになのる一声はまちてこそ猶やすまれぬれ

月になき雨にまたよの数そへてちはやふる神きほとゝきす

郭公をきゝて

かくしはしをちかへり来て我なあまねむのしかすへも待とな等

郭公一声

いく夜の数にひくさにいひ出ん声一声のやまほとゝきす

郭公過

きゝはるも猶もひさゝめすほとゝきす今一声をきのふなる

山里にほとゝきすまつに鳴つりて

一こゑを夜ありもきくほとゝきす山係のかひをちかへてなき

海のほとりにて時鳥をきく

ほとゝきすいつしか今きの一声ハ浪ろへるむのんちそすれ

猶もふるとある比郭公をきゝて

郭公よそにおく声になしへとやものなにふ君を色りてける

郭公過

ほとゝきおれうとかる里ハあすともきのうち花を君とさそふなよ

西方聞郭公

みなみに中のやしろを過てはてなくやいなりの山時鳥

雲居郭公

村雨のなごりあとなくゆく雲に夢もおどろかれぬ後ぞまたれし

月おそき夕への雲のたえまより先夢さます郭公かな

閑中郭公

とふ人もなき宿のこゝろやはいひしてん山ほとゝぎす月にみるくれは

想後子規

ほとゝぎすいづちの山路とかたらしなれてや待つが夕暮すらん

暁に時鳥をきく

郭公なりしそのほどにさめぬめり夢の枕に花の暁の空

暁郭公

玉くしげ箱根の山乃明ぼのにまどろむ夢おどろかす郭公かな

深夜子規

ほとゝぎすまだふかき夜の絶間よりおちゆく月をしたひてぞ鳴

暮後郭公

おもひたえず宵そら行しも時鳥まちあかれなる老の袂さへ

郭公入夜琴

待わびて引よせし琴の緒乃琴になく音をさへまよふ郭公

宵々のかたらひ人とおもふまどの袂さそふ山ほとゝぎす

早苗

多摩河の井せきくだして禁田もあめもまちあへず早苗とるなり

採早苗

早苗葉さらふあまたや行ぬらん志づくの田居の五月雨の比

はまの野乃早苗村

さなへとるはまの野乃さと人もよにせのたは徳の秋や待らん

なき

植つ田のさなへとしもふら忘らなよなに咲なも人もとひ来ん

荊菖蒲

あやめふくまとふ乃ふめしをこさしと待はよとのにおりたちまくり

君か代のなかれ須乃あやめ草命はくてふためしにそ引

雨中菖蒲

五月雨にぬるともいかんあやめ草あやなくきよふをこさすやは

節後菖蒲

さまり江におふるあやめの根をふかくよに世のためや引しきえ

夏夜

なはの秋をむすふあやめ乃枕にふ袮なかき夜はかるゝひもなし

さみたれ

そらをなくかるもら行橘のさみたれあかさの明くれの空

橘乃さみたれちる比まき木のもと乃苔沿の露も香すなり

夜橘薫風

おもほえすをれうかす夕暮に袖のかたらるのまゝ乃こゝろ

風静夜橘芳

さみたれのよそに野もゆ咲ゆむ風のいやまさへ匂ふぬらし

橘薫袖

あかしはやさみたれのおひ風に右乃ほさそ袖かをるなり

枳橘

橘のはなちるやとに一枳ねん心のふもとの宿やむすはん

暁更思橘

たちはなにかをしく袖そかをるなりいつも昔のかたら枕は

盧橘子低

橘のはなの露そふ葉かくれに宿さへかをる雨の夕くれ

夏船

ささなみの小島か崎のおひ風に棹さす袖も香にそにほへる

あふち

村雨のなこりの露もにほひてちるやあふちの花の下かけ

薬猟

いめはつる夜野の草葉ふみしたき紀きそひかする清きなるも

霖

きのふけふはる木の陰も絶えにけり岩木の岩もしなえあな

閑中五月雨

とはれぬはならひし宿は五月雨のあまりとて誰をまたへは

旅泊五月雨

五月雨は日数ふるえのむやひ舟棹さへなみのしたに朽に紀

さくらかれ雨はなても朽もてるみをしるしるよの川なる

五月雨にたかきちなきおちのまくらぬきうつるへく

はれくも何にすさめん五月雨のそらもくてとふ人もなくれは

五月雨晴

さみたれに板井の水ハ流しまりこよひや月のかけやとさん

五月ばかり梅のやとに泊りて

花さかむ春をもちきる五月雨乃あやめの名に移ふらめの下くさ

水鶏

あやめ草おふる野澤のこもりに宿りあるまてたゝくひなかな

水鶏何方

柴の戸ハ明なから杯しなはのまたたく水鶏やいつこなるらん

暁水鶏

槙の戸をたゝきハやめて明る秋の水鶏ハ人をはかりさりける

夏月

あはさてもわするゝとしもみしか夜にまちとる夜の秋乃月

山のはの霧もきえねも隔てねと花紫にくもるなかの夏の月

短秋月

さらぬたに明やすき秋を月影のまよひて出るもなくもなる

水上夏月

ゆく水にやとむ影もおきなはの秋乃月ハ水と思ひてこゆる

山家夏月

涼しさの深こもあれと山さとハ志らつ月のかきやとりぬ

竹亭夏月

くれゆきハ月と風とをやとしはし夜をわするゝ窓の前の竹

夏月涼

棹さすハ夜をわするゝ夕河に夜りをくさく波の月かな

庭の秋月あかし

くさへたれゆく空のすゝしき風にこそ月乃ひかりはさえまされ

なでしこ

秋の野にさくやはなはなかきまもあかれはそへつゝてしらのに
露にしみのに咲けるあり

かつくも咲そめしより宿夜すほとんにた影ますます見え
なでしこ乃花さかりなるをみて

落葉の今一時の雨秋乃あはれのまつひをおほめてそ咲

愛閨妻

宵の雨乃ふるにいのと雲まさへらほおくろしき落夜乃あはれ
おもしろみさきまさを人のまちへやるとて

ちらぬ花をこそはなすはのよ落夜の心こめぬらしきになりなも

夜学

なつ草子野中のはらはしらぬもかの古緑をたどる計りに

秋ちかき野辺の萩むら露さへもむすふ斗りまた見えまさり

草花先秋

いはらにも秋のちくさの花さすもなではみえ行夜のうへかれ
千古のちまり末利に一もとおもほせるを乞ひて

めつらしき雨一もとのすりなれあまりなるまで今日はへぬ

葵

かくきまもなくされはあはれてもすすせまたてもむ虫を何かとるめぐ

百合

なつの野に誰をやさしと志のふらん紫うれにさく姫ゆりの花

鵜河

かはら人ゞ河らとや波のうへにみされてうつる鵜舟の篝火

折こそあれ月のかげゝの里人もやすらをすむる河ちかきて

岸照射

かゝるて麻のすゝとや尋ぬらんみちにほくしの影をうつす

所々照射

山やまき杉とやおもふふる月山ほくしのひかりやすく照せさとよ

夏虫

おろかなるあまそたくへん夜むしのむすふおもえるぬなをひい

蛍

風さそふ志のゝをさゝにちる露のあまりおほえてやとふ蛍かな

沼蛍

なは古乃うきいおもそふあまりゆくや沼沢のみこゝを蛍まて

瀧辺蛍

落瀧つ岩うてみのしら玉にひかりをそへて飛ほたるかし

くはむしのほたる

風さそふ夜野の草の葉末にすみほとうもあへぬやとふ蛍かな

蛍似露

やとふ蛍たまなき露とみえなから何ゆゑ消ぬ光なるらん

深秋蛍

うつろふをまつ池にとふ蛍よるておもひにうかれたゝする

晩夏螢

みそぎ河ちのわこえりもへほす袖の露とみだれてとぶ螢かな

ある曹司の主人をまつりまゐらするに螢のなきしひ
出しきれいといへることを

忘られの芝原にほる夜むしも住かぬ分よりあつまる光ひとつ

大井河の夏

夕ほたる流つ岩屋をあられ来てとなせの波に影ぞくだる

蚊遣火

いふせさはよそのこゝろもあるものや絶てぞ掃袖の蚊遣火

明日をまつとするもをりくかやり火に打払ふ袖のさしふき

かやり火を見て

あかつきの蚊遣のけぶりや袖もこゝ涼をまちわびつらん

蚊遣火に袖をふせやのいぶせさを払ひかねてや根やあかすらん

蓮

はちす葉の上とのこゝやをあくまこゝん露こそ人の世のたぐひなれ

池上蓮

池水のこゝ涼きすがたもあらはれつふかくもしまぬ花のさかりを

池の蓮をみる

影うつすいけの鏡のきよければ葉のうれにさく花もみえけり

氷室

大君の御代ながき坂の氷室ありいくとせ夏をよそに住るを

千世のきて涌ぬるあしと氷室守松の待に住なれしかな

夕立

あさお山みねに小竹雲こえてゆふたちすゝしあしのはつる

夕立晴

かくるゝ月やとさん夕たちのなこりとむる玉さゝの露

蝉

いくおろす松のあらしにまくひ来て秋松は中ゝ蝉のもろ声

瀧急蝉

落る紀の里ゆの波にこゑへはて梢にむせふせゝのもろ声

岩紀川の岩こす波にきそはれて峰より落る蝉のもろ声

あふき

うちも松手とるや扇のこゝろさし紀誰ゆかりとて袖になるらせる

秋ちかくあふきの風にかよひきり袂み月のかたちをやとして

閨扇風

なれしか香こそ風もすゝふなれ誰まころ閨の扇そ

泉

袖ひちてむすふ岩ゆのさゝくに夜とはいえこそ見はさりけれ

泉のまへのすゝみ

すみなと山井のみをいくむすひ語へともなほあかぬきふぐ

但有泉声洗我心

むら山の岩垣しみ声あくはこ縁のなとなふをきくる嬉し

水風晩涼

夕風乃さそはさりせは池水のさゝ縁に夜をすゝするへしやハ

近水瀬涼生

蓮葉乃露もてあそく夕風もなれきの君は先そすゝしき

細涼

風さやく松蔭りしみ下すみ寄ちる袖ハぬれぬともよし

樹陰細涼

すゝしさ猶ますゝ袖に露ちりて苔のむしろを拂ふ松風

百首歌の中に松なし題を

涼しさのいほこそあれと夜ハしく夕風そよくあとの下かき

松下近涼

山松のひゞきを深に増ふなるあつさ猶あらふ人ちのとして

すゞし河にあをとえそ

夕川のすゝしさとめてあく毎ハあのこら綿のゆくに帰りせん

相倉の君乃深川のみなちそて

風すゝ楓しもの下寄にぬれてたもとハ夜なかりけり

樹陰夜風

衣手もぬれてけりに松ふゆるやとつえ心あらすゑゝの下風

夏神楽

なほくつあるなねしく椎柴の下ゆく水に月もやどれる

荒和祓

落祓河瀬に落るぞすぬ葉乃あるすくしなの白波

祓麻

はらさ人さよ紀なきさるぬさをくてそいつすの落つりとて

はらひすゝき袖に法とゝきてなり渺くまみてゝぬま 丘凡